

# 樹 芸 へ の 期 待

村 野 紀 雄

## はじめに

3年前、道立林業試験場に、樹芸樹木科という新しい研究部門ができた。当時、試験研究の科名に樹芸樹木という名称が使われたのは全国のうちでもはじめてのようで、樹芸ということに限っても、東京大学の樹芸研究所（静岡県賀茂郡南伊豆町）と農林省林業試験場の樹芸研究室（埼玉県比企郡鳩山村）の二つしかないものであった。

## 樹芸の意味

この樹芸樹木とはいったい何であろうか。ほのぼろへ聞きまわってもこの四文字ひとつづりの言葉を使用している例をみいだすことができなかったので、樹木という字を単に樹芸に付随する材料を意味するものと考え、今、樹芸ということばだけについて、その意味をあきらかにしてみると、まず、広辞苑や字源には「樹木を育てる」とか「草木を植える」という意味がある。また樹の一字だけをとり出すと「たちき」「かき」「へい」などの名詞のほか「うえる」という他動詞の意味があるが、芸という一字にもまた、「わざ」「技芸」「芸術」などのほか「植える」という意味がみいだされる。

また上原敬二博士の「応用樹木学」の中では、樹芸の字義について、要約すれば「樹芸とは草木を植えることを意味し、古来、中国では園芸の一部としていた。中国古字からすれば、樹という字は、木と壺と寸が合わさったもので、壺は祭壇をあらわすほか立つ、立てるという意味があり、寸は人間の手をあらわす。つまり、樹は祭壇の前に手をもっていねいに木を植えるということを示す。木は単独では死んだものであるが樹は生きている木を意味している」と述べている。

このことから、樹芸という言葉は相当昔からあったことがうなずかれるが、当場の今はなき横山さんによれば、大正のはじめごろ三浦伊八郎、上原敬二両博士などによってとくに樹芸学というものが提唱されたことがあるという。そこで上原博士の出している樹芸学叢書などを見ると、それは樹木の風致的な応用に関することで、とくに造園樹木のとりあつかい方を主要な内容としている。

そのほか「林業百科辞典」には樹芸作物ということばがあって、それはクリ、クルミ、ウルシなどの特用樹木のことであり、果実や樹皮、樹液等のように樹木の特殊な部分を利用されるものともしている。

また前記の東大の樹芸研究所では、実際には、熱帯の特用樹木の研究を研究項目の前面に

かかげて研究を行なっているし、赤沼の樹芸研究室でも研究項目に特用樹の研究をあげ、そのほかに育苗および育林の研究をあげている。またかつて東大樹芸研究所の郷正土所長は、樹芸を「ポプラなどのような畑作物に近い樹木の栽培、すなわち栽培林業とうけとめている」と筆者に個人的な意見を寄せられたことがある。

ここで当场が樹芸樹木科の外国人への紹介の際にあてている英語のアーボリカルチャー (Arboriculture) という語についてみると、ウェブスターの英語辞典では、育林と対比させてとくに「観賞を目的とする樹木や灌木の栽培」としている。しかし、エンサイクロペディア アメリカーナという百科辞典では、もっと広く「樹木の科学的栽培および管理」としており、具体的な内容として、育林、果樹栽培、観賞樹の栽培、樹木の病害のコントロールなどをあげている。

一方樹芸の出所は往時のドイツ語訳にあるという説もあり、その原語が何であるかは筆者にはまだ解らないが、それに近いと思われるものにフォルストクンスト (Forstkunst) がある。このことばはフォンザリッシュが1876年(明治10年)に創始した(今田敬一博士の「森林美学の歴史と批判に」よると)いう森林美学 (Forstästhetik) の中で用いられており、日本で「森林美学」を著わした新島善直、村山醸造氏たちによって森林の美的経営と訳されている。このフォルストクンストを辞書によって分解すれば、フォルストは森林、営林、クンストは術、技術、芸術、美術、文芸の意味があり、あわせて森林美術とでも直訳することができる。森林美学のことを今田博士の前記の書では①森林美の本質の研究、②森林美の育成、保存および開発に関する理論の研究をする学とし、また村山氏たちの前記の書でも、森林に関する一切の美的活動を研究する学と定義して、森林美術はその応用としている。

さてここで注目したいことは、村山氏たちが「森林美学」の中で公園、庭園や並木などのとりあつかい方を述べながら、これらが森林美術と関係はある(樹木を使うから)が、森林美学の範ちゅうには入らず、土地美化術ないしは造園芸術であるとわざわざ断わっていることである。ドイツの森林美学者ブルックハルトなども森林の美化を森林の庭園化や公園化とは全然別なものとして、「森林をして常に森林であらしめよ」と言っていたということである。

以上満足のゆくせんさくには至れないが、樹芸にこめられる意味をそれなりにまとめるとつぎのようになるであろう。

## 1. 特用樹の栽培

- (1) クリ、クルミ、ハゼなどのいわゆる特用樹を対象にしたもの
- (2) リンゴ、ミカンなどの果樹を対象にしたもの
- (3) ポプラなどの速成樹を対象にしたもの

## 2. 樹木を使った景観の構成、保護、管理

- (1) 森林を対象にしたもの
- (2) 公園、庭園、植物園、並木などを対象にしたもの

## 樹芸をとりあつかう者

これらの樹芸が、実際にはどのような人たちにとりあつかわれているかといえば、特用樹の栽培については、林業、園芸、農業のうえにまたがっており、なかでもクリ、クルミなどは農業者に、リンゴ、ミカンなどは園芸業者に、ポプラなどは林業、農業者にとりあつかわれていると考えられる。

一方、樹木をつかった景観の構成、保護、管理については、森林では、国、公立公園などの厚生関係者、施業林を扱う林業関係者、また庭園、公園などは都市建設関係者や造園業者によっている。そのあつかい方には多少の差があるが、この場合いずれも人間の生活に有益な景観を与えているものと考えることができよう。そしてこの関係の研究施設としては、大学の林学、農学、造園学、都市工学、植物学などの研究室や、園芸、農業、林業などの試験場があり、考えようによっては社会科学や、人文科学の分野にもひろがっている。

このように樹芸に含まれる内容は雑多で、その内容を全部統一してとりあつかっているところは現在もちろん見いだされていない。

## 樹芸への期待

さて、さいきんのとくに生活環境の改善、整備への世論の高まりのなかで考えると、これからの樹芸を考察する場合、都市の中の緑の構成と、自然（森林）の保護ということが大きなポイントになると思われる。

欧米ではこの二つのことは100年も前から認識され、各種の緑地の構成（一例としてロンドン市周辺に5・10 kmのグリーンベルトが設けられていることなど）や広大な面積内の自然の保護（アメリカのナショナルパークなど）が行なわれてきている。文明がすすめばすすむほどこの面への配慮が必要とされているのである。

日本ではさいきんまでは都市内の緑の構成には一般の認識が浅かったせいもあって極端に言えば、鉄とコンクリートばかりの街が多くなり、また周辺の自然景観の崩壊も進む一方で、物質生活の向上とは裏腹に生活環境は荒廃に向ってきたといえよう。

都市と緑の関係はいかにあるべきか、また人間と緑の関係はどうあるべきかという基本的な問題は筆者の知る範囲ではまだ未解決のものと考えているが、しかし、緑のない生活環境が現在の地球人にとって気持のうえで生活しづらい場となることは確かで、現実には緑を維持しようとしても公害等で維持できなくなるとき人間もまた同じように健康をそこねがちであることを認めることができる。人口の集中が激しくなっていく傾向にあるさいきんの都市の中にあるはこの緑を維持し、構成することは今後ますます困難になり、問題も多くなるにちがいない。

また自然の森林と人間の生活との調和が必要なことや現在の自然の環境を後代の人たちに残す責任のあることなどが多くの人たちによって説かれ、そのための施策も構えられてきたが、

それでもなお消失してゆく自然の森林について、より明確な情報が必要と考えられる。またこの自然を人間にとってもっとも賢明に利用するために、保護、維持、そしてその利用の方法を明らかにすることが、この自然の比較的多く残されている北海道ではとくに求められていることであろう。しかし、その研究の場はまだ少ないものと考えられる。

このように考えると、これからの樹芸には、樹木や森林の生態や、都市計画、設計などをもとにして、人間性の問題を追求する相当高い目標が含まれ、期待されているといえよう。